

形容詞と主要部名詞の意味的依存関係

月 足 亜由美

Semantic Dependencies of Adjectives and their Head Nouns

TSUKIASHI Ayumi

Abstract : This paper aims to clarify in what ways adjectives and their head nouns are semantically dependent on each other in their attributive and predicative uses. Adjectives usually designate one basic and abstract property, and they assign the property to one or some aspects of the head nouns, which are referred to as facets or qualia roles. Each facet or qualia role differs in the degree of integration and autonomy, and this yields different interpretations of adjective-noun combinations. In considering the dependencies of adjectives and the head nouns, there are some cases where we need more background knowledge about the contexts, including participants or locations. In Section 3, we briefly look at conceptual blending and see how the conceptualizer assigns the property designated by the adjective to some participant in the particular situation.

1. 序

英語の形容詞が限定用法 (attributive use) または叙述用法 (predicative use) として用いられる場合、共起する名詞あるいはコンテキストによって多義が生じることが多い。例えば *rough* という語を辞書で見ると、(1 a) の「表面がざらざらしている」という意味のほか、「大ざっぱな」(1 b), 「つらい, 困難な」(1 c), 「扱いなどが荒っぽい」(1 d), 「荒れた」(1 e), 「快適でない」(1 f) といった多くの意味が挙げられている。

- (1) a. Her hands were rough from hard work.
 b. a rough sketch of the house
 c. Sounds like you had a rough day.
 d. Don't be too rough – he's only little.
 e. a rough part of town
 f. The journey was long and rough. (LDOCE)

この複数の意味は、形容詞そのものにもともと備わっている意味として、個別に独立した形で私たちの知識の中に蓄えられているわけではない。修飾されるまた

は主語である主要部名詞 (head noun) の意味に影響を受けて多義が生じていると考えられる。直観的にも、*rough* の基本的・抽象の意味が、共起する名詞の意味に合うようにメタファーに基づく拡張を起こしているのが感じられる。基本的・抽象の意味を、身体をもって感じることでできる「表面がざらざらしている」という、なめらかではなくどちらかと言うと不快な感触のするものだと考えれば、その感じと、例えば (1 d) における、聞き手の小さい子に対する態度の粗雑さ、繊細さの欠如との間に、類似点を感じられるのである。

また、同一の名詞句であっても複数の解釈の可能性を持つ場合がある。よく議論される例の *red pencil* は、「表面が赤色の鉛筆 (「赤い鉛筆」)」「赤い芯を持つ、赤い線が書ける鉛筆 (「赤鉛筆」)」という、*active zone* の違いによる二つの意味を持つ。

- (2) This red pencil isn't red.
 (Langacker 1987 : 274)

論理的には矛盾する (2) であるが、*active zone* の違いによる *red pencil* の解釈に応じて補語の *red* が他方の意味で解釈され、問題は生じない。また、*red pen-*

cil は「赤いユニフォームのチームの記録をつけるための鉛筆」「赤い口紅の汚れが付いた鉛筆」「赤字を記録するための鉛筆」など、コンテキストによってその場限りの、様々な意味で使われる可能性がある (Fauconnier & Turner 2002: 355)。

形容詞の多義にはその主要部名詞の百科事典の意味とコンテキストが大きく関わっていると思われるが、本稿では、どう関わっているのかという問題を考える。次節では主要部名詞の多面性を考える上で Croft & Cruse (2004), Cruse (2011) の facets や ways-of-seeing, Pustejovsky (1995) のクオリアといった概念が有効であることを見る。また、事象における参与者や反事実スペースなどを想起する必要のある概念融合 (conceptual blending) を用いた考察について、3 節で概観する。

2. 名詞の多面性と形容詞

2.1. 依存度の程度差

限定用法の形容詞はしばしば、絶対的な (absolute) なものと相対的な (relative) ものに分けて考えられることがある。例えば Dillon (1977) の名詞句の分類を当てはめてみると、前者の例として *blind dog*, *red car* が挙げられ、「名詞の意味に依存せず形容詞の意味を決定できる性質 (“the property of being able to determine the denotation of the adjective independently of that of the noun” (p.57))」を持つ、形容詞の修飾用法としてはプロトタイプ的なものであるとされている。*red car* は、「赤い」ものの集合と「車」の集合が交差するところのメンバーを指すと考えられる。また、その物体が何であるかわからないままでも、それが「赤い何か」であることは認識可能で言語化できるということも特徴である。〈色〉よりもさらに「名詞の意味に依存しない」程度が高いのは〈形状 (shape)〉を表すもので、内在性が高く、他のモノとの比較・参照を必要としない (Langacker 1987: 160–161)。

Dillon (1977) が挙げる相対的な形容詞の例としては *large car*, *small dog*, *good car*, *wrong house* などがある。私たちが *large car* と言うときは、車の平均的な大きさと比較して「大きい」と言っているのであり、絶対的な大きさは例えば *large house* と言う場合より小さい。*small dog* の場合も同様にその形容詞の意味は名詞に依存している。*good car* と *wrong house* は同じタイプのものでまとめられているが、名詞の性質を取り出さなければならないという点で、形容

詞と名詞の依存度がさらに高いものとされている。つまり、*large car* は車の「大きさ」について言及していることが語の意味により決まっているが、*good car* は車のどの性質について *good* と言っているのかについて複数の可能性があり、コンテキストなしでは決定できない。話し手によって車の何に注目しているかが異なり、性能、燃費、乗り心地、外観など、どこかを挙げてそれが *good* だと言っている。また、例えば *right* についてもコンテキストなしで意味を説明するのは難しく、Dillon はパラフレーズするとすれば “in accordance with the relevant standard (p.59)” が最大限だとしている。

- (3) That's not the right book. Bring me the other one. (Dillon 1977: 60)

(3) における “the relevant standard” は「話し手の意図したもの (本)」であり、「それと一致しない」ということを言っている。*good car* の場合と違って、名詞のある部分の性質について言及しているわけではない。筆者は学生時代に米国に留学した際、日本では車が左側通行であることについて友人が “They drive on the wrong side of the road.” とよく言っていたのを覚えている。*wrong* と言えば “You are wrong.” や *wrong answer* という使い方や意味しか知らず、このような使い方に違和感を感じたのを覚えているが、これはその話し手の「(右側通行であるという) 基準と一致しない」という意味である。

Dillon の分類に従えば *red*, *blind* はいわゆる絶対的な形容詞、*large*, *small*, *good*, *right* は相対的な形容詞と考えられることを見たが、この区分はむしろ連続的なものとして捉えなければならない。そしてその連続性は、形容詞と主要部名詞の依存度の程度と重なる。つまり、*red car* では形容詞と名詞の依存度が最少であり、*red* の意味は名詞にほとんど影響を受けていない。*large/small* は、共起する名詞の平均的なサイズに照らし合わせて判断がなされるという点で、その名詞の指示物としてあり得るサイズの幅に影響を受けていると言える。ここで注意したいのは、名詞の意味にほとんど依存しないと考えられる〈色〉を表すもの、例えば *red* でも、*red hair* となれば髪の色として可能な色彩の範囲に照らし合わせて *red* という判断がなされるので、*large/small* と類似点が見られることである (Miller & Johnson-Laird 1976: 357)。よって、他の多くの名詞と共起したときの「赤」とは異なる色

が想起され、*hair* という名詞にある程度は依存している。*good/bad, right/wrong* などでは、形容詞と名詞の依存度がさらに高くなる。例えば椅子について何が「良い」のかという内容はナイフについて「良い」内容とは全く異なり、お互いに関係もない (Miller & Johnson-Laird 1976: 356)。

以上、形容詞と主要部名詞の依存度について程度差があることを見たが、その依存関係はどういうものであるのかを詳しく考察するのが本稿の目的である。2.2 では特に依存度の高い *good* を中心に、2.3 では同一の名詞について共起する形容詞を挙げ、それらの依存関係を考える。

2.2. *good* について

good car, good knife など人工物に *good* が付く場合をまず考えてみる。人工物は人間がその使用の目的を想定して機能を持たせて作ったものなので、その目的を達成することにおいて「良い」という評価を下すことが一般的である。ナイフは物体を切ることを目的に作られたものなので、*good knife* はそれを遂行しやすい、つまり「よく切れるナイフ」という意味で使うのが最も一般的である。「車」についてはより多くの側面が関連しているが、これについて Pustejovsky (1995) で提案されたクオリア構造 (Qualia Structure) を用いた、小野 (2005) の分析を見てみよう。

クオリア¹⁾とは「語彙項目に関連した、その語をもっともよく説明する属性や事象の集合」(小野 2005: 24)であり、クオリア構造は次の四つのタイプに分けられる。

- (4) a. 構成クオリア (Constitutive Qualia):
物体とそれを構成する部分の関係: それは何でできているか。
- b. 形式クオリア (Formal Qualia):
物体を他の物体から識別する関係: それは何か。
- c. 目的クオリア (Telic Qualia)
物体の目的と機能: それは何のためにあるか。
- d. 主体クオリア (Agentive Qualia):
物体の起源や発生に関する要因: それはどのようにできたか。

(小野 2005: 24, 2008: 267)

小野 (2005: 25) を参考にして、「車」をこの四つに当てはめてみると、以下のようになる。

- (5) a. (構成クオリア) 車体、タイヤ、エンジン、シート、ウインドーなどから成る。
- b. (形式クオリア) 人工物であり、車としての形をしている。
- c. (目的クオリア) 人や物を移動させる。
- d. (主体クオリア) 人間が作った、工業製品である。

「車」はこのような多面的情報を持った語であり、*good* という属性を概念主体 (conceptualizer) がどこに認めるかという可能性は複数ある。エンジンの性能がよく走るということなら構成クオリア、外観が良いということなら形式クオリア、大量の荷物が積み重ねられて快適に移動できるということなら目的クオリアに、それぞれ *good* という属性は認められていることになる。形容詞と名詞の依存関係を考えれば、形容詞 *good* の意味は名詞の一側面または複数の側面 (例えば「性能も外観も良い」という場合) に依存し、名詞句の複数の解釈を生み出している。

上で触れた *good knife* では目的クオリアについて *good* という評価がなされ「よく切れるナイフ」という解釈が最も自然であるが、属性を認めるクオリアを特に一つに限定する必要はないし、概念主体がどのクオリアに注目しているかを明示的に示す必要もない。Miller & Johnson-Laird (1976: 230) は、*good table* には「テーブルのあるべき典型的な形をしている」という意味と「テーブルとしての機能を果たす、使いやすい」という機能に着目した意味の二つがあるが、テーブルの使いやすさは形に関係するので、これらの二つの意味はほとんど区別できないことを指摘している。

名詞が人工物以外の場合はどうであろうか。例えば *That's a good price.* という例を考えてみよう。*price* のクオリア構造は概ね次のようなものであろう。部分から成るモノではないので、構成クオリアは記載していない。

- (6) a. (形式クオリア) 買い手がモノやサービスに対して支払う金額のことである。高低の幅を持つ。

1) 小野も断っている通り、Pustejovsky (1995) では “qualia roles” という用語が使われているが、ここでは小野に従い「クオリア」という用語を用いる。

- b. (目的クオリア) 売り手の商業活動, 買い手の購買活動を成立させる。
- c. (主体クオリア) 売り手が一方的に設定するか, 買い手との交渉を経て合意する。

good price が誰にとって *good* かといえば, 低い額を払えば済む買い手にとってということが最も一般的である。*That's a good price.* という文を売り手が発したとしても意味は変わらず, 買い手の視点から見て *good* という意味である。こう考えれば形式クオリアに関連しているように思われるが, *good price* だと買い手の購買活動が促されるわけであり, 売り手にとっても利益になることを考えれば, 目的クオリアに関連しているようにも思われる。モノについての判断に, 高低, 大小, 多少といった尺度が関係する, 他の例を見てみよう。

- (7) a. We've had a good crop of apples. (LDOCE)
- b. She has a good income.

price の場合と異なり, 「収穫量」や「収入の額」といった尺度の上で高いことを表している。*income* が *good* ということは受け取る側が多くの恩恵を被ることのできる, 「額が高い」ということである。*price* や *income* を取り巻く状況にどんな参加者が関わり, 額の高低がそれぞれの参加者にどう関わっているかといったことが, *good* の意味に影響を及ぼしている。このようにより広いコンテキストについての背景知識が必要である場合については, 3 節でとり上げる。

本節のまとめとして, Wierzbicka (1986) が論じる, 名詞句内での形容詞の役割について触れたい。*the main street* のように, 名詞の指示物の特定を促す制限的な性質 (restrictive character) と *your dear wife, poor grandma* のように指示物に対する話し手の態度を示す非制限的な性質 (non-restrictive character) といった違いはあるものの, 「形容詞は名詞によって喚起される多面的イメージに属性を与えるものである (“... it can always be seen as adding a feature to the (normally) multidimensional image evoked by the noun.” (p.373))」としている。つまり, 形容詞が様々な属性を表すのではなく, 名詞のほうが多くの属性を持っており, 形容詞は名詞の属性のうちのどこかを焦点化して, 名詞のイメージを豊かにする役割を果たしているのである。本節で見た *good* についても, *good* が多義なのではなく, 名詞のどの側面にその属性を付与するかの違い

が解釈の違いを生み出していると言える。しかし, 既にみた *good table* のように, お互いの側面の関連性が高い場合は *good* という属性をどこに与えているのか特定できず, 実際, それは頻繁に起こることである。例えば *Did you have a good vacation?* という発話において, 我々は聞き手の休暇のどの側面が良かったかを特に聞いているのではなく, 総合的にみて良い休暇だったかと聞いていると考えるほうが自然である。

2. 3. 同一の名詞と共起する形容詞

形容詞と主要部名詞の依存関係について, 前節では *good* という形容詞に着目したが, 本節ではいくつかの名詞をとり上げ, 共起する形容詞とどのような関係にあるのかを考えてみる。Croft & Cruse (2004), Cruse (2011) は, クオリア構造をモノに対する「異なる見方 (ways-of-seeing: WOS)」として以下のように捉え直している。

- (8) a. The **part-whole WOS**: views an entity as a whole with parts (e.g. a horse, as viewed by a vet).
- b. The **kind WOS**: views an entity as a kind among other kinds (e.g. a horse as viewed by a zoologist).
- c. The **functional WOS**: views an entity in terms of its interactions with other entities (e.g. a horse as viewed by a jockey).
- d. The **life-history WOS**: views an entity in terms of its life-history, especially its coming into being (e.g. a book as viewed by an author or publisher).

(Croft & Cruse 2004: 137)

(a) は構成クオリア, (b) は形式クオリア, (c) は目的クオリア, (d) は主体クオリアにそれぞれ相当する。Croft & Cruse は, 例えば *an expensive hotel* という複数の解釈が可能な名詞句は, これらのどの見方をとるかに応じて解釈が決まるとしている。それぞれの異なる見方に対応する意味は次のようになる。

- (9) a. *Kind WOS*: 'a hotel that is/was expensive to buy'
- b. *Functional WOS*: 'a hotel that is expensive to stay at'
- c. *Life-history WOS*: 'a hotel that is/was ex-

pensive to build'

(Croft & Cruse 2004: 138)

ホテルというモノを、(19 a) は不動産としての建物、(19 b) は宿泊施設、(19 c) は建築物としてそれぞれ見ており、それぞれの活動に関わる値が高い（高かった）という意味が生じている。*hotel* と共起するその他の形容詞は、ホテルのどの側面についてその属性を付与したものなのか見てみよう。

私たちはホテルを宿泊施設として見ることが多いので、その見方 (functional WOS) から見た属性を表す形容詞が高い頻度で共起する。*comfortable hotel*, *pleasant hotel* のような例である。*luxurious hotel* も、ぜいたくな、宿泊するのに快適な雰囲気を作り出しているという点で類例だと言えるが、その要因は高価な構成要素（施設、家具、調度品、アメニティなど）を含んでいることなので、part-whole WOS をとっているとも言えよう。*international hotel* においては、構成要素の一つである客が世界各地から来ている、あるいは多国籍のバックグラウンドを持っていることがそのようなホテルの特徴を生み出していると考えられ、part-whole WOS がより前面に出ている。*friendly hotel* は客ではなくスタッフ側の特徴について言っているが、*posh hotel* では客ともスタッフとも決定できない、構成要員の特徴に着目していると思われる。kind WOS はホテルを「建物」として見る見方であり、*large/small hotel*, *centrally-located hotel*, *old hotel*, *run-down hotel*, *shabby hotel* など、「どんな建物か」を示す例がある。

事物のどの側面に言及するかが切り替わることを、Croft (1993) は“domain highlighting”と呼び、典型的にはメトニミーにおいて起こるものだとしている。

(10) a. Time magazine is pretty vapid.

b. Time took over Sunset magazine, and it's gone downhill ever since.

(Croft 1993: 348)

(10 b) は出版物としての *magazine* についてではなく、その出版社について述べたメトニミーである。雑誌には出版のプロセスがあり、雑誌にとっては二次的な領域 (secondary domain) であるそのプロセスに注目し、その中の重要な参与者である出版社について言及するという domain highlighting がそのメトニミーの背後にあると考える。Croft はさらに、通常メトニミーとは扱われない、(11) の *book* の多義性において

も domain highlighting が起こっていると言う。

(11) a. This book is heavy.

b. This book is a history of Iraq.

(Croft 1993: 349)

(11 a) は〈冊子体〉、(11 b) は〈書かれたテキスト〉としての側面に言及しているが、どちらの側面も「本」に内在する要素であり、外在するコンテクストを考え合わせた上で生じる (10) の *magazine* の多義性とはその点で異なるものであり、よってメトニミーとは見なされない。*book* のこれらの側面（「構成要素」(components)）を Croft & Cruse (2004) は facets と呼び、メトニミーとの違いは、facets 間の結びつき (integration) の程度差だと考える。facets 間の結びつきの程度が高ければ各 facet の自立 (autonomy) の度合いは弱くなり、結びつきが弱ければ各 facet はそれぞれ自立した “full sense unit” に近いものとなる。例えば *factory* の〈建物〉(= 12 a) と〈(そこで働く) 人々〉(= 12 b) という facets はそれぞれ自立度が高く、二つの facets を一つの文に混在させようとする、容認度は高くない (= 12 c)。

(12) a. The factory was blown up.

b. The whole factory came out on strike.

c. (50%?) The factory that was blown up came out on strike.

(Croft & Cruse 2004: 125)

一方、*book* の facets を混在させた (13 c) は問題なく解釈可能で、*factory* の場合よりも結びつきの程度が高く、自立度が低いと言える。

(13) a. a red book [= TOME]

b. The book is funny. [= TEXT]

c. You'll find that red book on the top shelf very funny.

(Croft & Cruse 2004: 125)

先に見た、*hotel* の場合はどうだろうか。

(14) a. an old hotel [Kind WOS]

b. I found the hotel quite comfortable. [Functional WOS]

c. I found the hotel quite friendly. [Part-whole

WOS]

d. I found the old hotel quite comfortable.

[Kind WOS + Functional WOS]

e. I found the old hotel quite friendly. [Kind

WOS + Part-whole WOS]

(14 d), (14 e) のように、異なる観点から見た異なる側面を混在させることは可能で、*book* と同様、それぞれの側面の結びつきは高く、自立度は低いことがわかる。例えば *Did you like the hotel?* という質問は、〈建物〉として、あるいは〈宿泊施設〉として気に入ったかを聞いているのかあいまいであることから、それぞれの側面の自立度は高くないと言える。

ここで、Cruse (2011) が説明している、*facets* と WOS との違いについて見てみよう。事物の異なる *facets* をみることと、事物を異なる観点からみること (異なる WOS を採用すること) は同じではない。Cruse (2011: 111) によれば、異なる WOS からみた各側面は、*facets* よりもそれぞれの自立度 (*discreteness*) が低いという。

(15) John began the book. (Cruse 2011: 112)

(15) は本を「書くのを始めた」と「読むのを始めた」という二通りに解釈される。この *the book* の *facet* はどちらの解釈においても [TEXT] なので、*facet* の違いとして説明することはできない。本がどのようにして出来上がるかに着目する、つまり *life-history* WOS をとれば前者の解釈が生じ、本は読まれるものであるという目的クオリアを焦点化、つまり *functional* WOS をとれば後者の解釈になる。このように、*facets* よりもクオリアのほうが自立度が低く、より細かい解釈の違いを説明できることがわかる。

hotel の場合に (15) と同じ多義性が生じるか見てみよう。**begin the hotel* は容認されないので、*start* で見てみる。

(16) Have you started the hotel?

この場合は、ホテルの機能面を焦点化した「宿泊を始めたか」または「宿泊施設の経営を始めたか」などの、(15) と同様の解釈は得られない。しかし、ホテルの設計や建築を焦点化して、それらを始めたかとい

う解釈は可能である²⁾。つまり、*life-history* WOS をとっていることになる。ただし、*hotel* に不定冠詞を付けて *Have you started a hotel?* とすると、「宿泊施設の経営 (ホテルビジネス) を始めたか」という目的クオリアに着目した解釈が可能になる。*a hotel* はホテルを〈宿泊施設〉として、*the hotel* は〈建築物〉として見ているわけだが、相対的にいえば前者はホテルの内面的、後者は外面的な特徴である。名詞句が限定的になると外面的な側面が前景化されるこの現象は、例えば *novel* における現象と共通している。本来は *novel* の〈冊子体〉としての *facet* が表に出ることは難しい (*?a red novel*, *?a dirty novel*) が、*that* などの限定詞が付くと、〈冊子体〉の *facet* が前景化される。よって、(17) の下線部のように、*red* といった〈冊子体〉の属性を示す形容詞との共起が可能になる。

(17) All the novels are on the right and the travel books are on the left. Incidentally, I want to show you something – pass me that red novel on the top shelf.

(Croft & Cruse 2004: 123; 下線は筆者)

ここまで考えてきた名詞のクオリア構造や複数の WOS といったものによって、Vendler (1968: 88) の例、*a beautiful dancer* の二つの解釈が説明できると思われる。ダンサーとは人であると同時に、踊るという行為を行うことでダンサーと呼ばれるわけで、この二つの側面が *beautiful* という形容詞と結びつき、多義性を持つことになる。その人の外見や容姿、つまり形式クオリアにその属性を認めれば “a dancer who is beautiful”, 踊るという機能面、目的クオリアに属性を付与すれば “a dancer who dances beautifully” という意味になる。では、*a beautiful singer* はどうだろうか。*She sings beautifully.* と言えるのにも関わらず、*a beautiful singer* という名詞句は「歌がうまい人」という意味にはならない。*singer* という名詞の目的クオリアと *beautiful* がうまく結びつかず、形式クオリアにしか属性が付与されないのである。動詞の *sing* であれば *beautifully* と共起可能であることを考えると、名詞の *singer* になったことで歌うという行為が動詞の場合より背景化され、もともと *voice* や *way of singing* に属性を付与して「美しい声で歌う、歌い方が美しい」ということを示す *beautiful* と結びつくことが難

2) ただし、インフォーマントによれば *planning* や *building* など、本来あるべき動詞が省略されているという感じが強く、容認度は高くない。

しいのだと考えられる。*a beautiful CD* (Croft & Cruse 2004: 116) という例があるが、中に入っている楽曲は CD の重要な構成要素であり、そこに *beautiful* という属性を認めて言語化することが可能となっている場合である。

3. 概念融合

形容詞と主要部名詞の依存関係を考えるにあたり、参加者や場面などを含めた、より複雑で広いコンテキストを考えなければならないケースがある。その例として、*safe* を取りあげ、概念融合 (conceptual blending) という概念について見てみよう。

safe には「危害を受けない(not likely to be harmed)」と「危害を加えない(not likely to cause harm)」という二つの意味がある (マクベイ・大西 2003: 227)。子どもが海辺でシャベルを使って遊んでいるという状況で、*The child is safe.* という文は「子どもは危害を受けずに安全だ」という意味だが、*The beach is safe.* または *The shovel is safe.* は後者の意味で、子どもに対して危害を加える存在ではないということである。この *safe* の使い方について、Fauconnier & Turner (2002) は概念融合という概念を用いて説明している。これらの表現の言語化または理解には、「危険のフレーム (danger frame)」という抽象的なフレームが関わっており、その中には *victim*, *location*, *instrument* といった要素が含まれる。そしてこれらの要素に *child*, *beach*, *shovel* それぞれが割り当てられ、「仮想のシナリオ (imaginary scenario)」つまり反事実のシナリオが完成し、その中では例えばその子どもが危ない目に遭う。この抽象的なフレームと、「子どもが海辺でシャベルで遊んでいる」という特定の状況との融合が“blending”とされる。*safe* という語は、この融合されてできた反事実のシナリオと、現実との間に類似性がない、つまり、子どもが *victim* になったり、海辺やシャベルが危害を与える *location*, *instrument* になったりすることはないという意味になる。また、参加者が担う役割が異なれば、文の意味が違ってくることになる。もし子どもがシャベルを壊しそうな状況であれば、シャベルが *victim* として割り当てられるからである。

例えば *The jewels are safe.* という場合、概念融合が起きてできた反事実のシナリオの中で *victim* は *jewels* ではなく、その所有者である。そのように、フレームの中にコンテキストに応じて多様な役割を設けて

参加者を組み入れることができる。例えば次の例を考えてみよう。

- (18) Bungee-jumping is much safer than many people think. (マクベイ・大西 2003: 227)

「危険のフレーム」と特定の状況が融合された反事実のシナリオの中で、*victim* はバンジージャンプをする人である。そして現実にはその人は *victim* にはなることがなく、安全だという意味である。つまり、この場合の *safe* という形容詞は *bungee-jumping* という名詞にではなく、その名詞とメトニミーの関係にある参加者 (a metonymically related entity: Radden & Dirven 2007: 148) に結びついて属性を付与していることも、この概念融合を考えることにより明らかになる。

このように広いコンテキストの中で何または誰にどんな役割が与えられるかを考える必要のあるケースとして、*polite* を考えてみよう。

- (19) a. I was impressed by the polite and efficient cabin crew.
b. a clear but polite request
c. Cal replied with a polite but firm ‘no’.
d. Jan expressed polite interest in Edward’s stamp collection.
e. I smiled a polite greeting, but the woman hardly acknowledged me.

(LDOCE)

発言や態度などを総合してその人が礼儀正しいと言っている場合 (19 a) のほか、その行為 (= 19 b) や発言のことばそのもの (= 19 c) に礼儀正しいという属性が認められる例が見られる。(19 d) と (19 e) はいわゆる転移修飾語 (transferred epithet) の例であるが、概念融合の考え方がうまく機能するように思われる。(19 d) では、抽象的な「無礼さ (impoliteness) のフレーム」に *Jan* や *Edward*, 彼の *stamp collection* などが組み入れられて反事実のシナリオが作られる。その「反事実」の中では、*Jan* は *stamp collection* に対して興味を持っていないが、それでは無礼だと受け取られるので、現実の世界では興味を持っているようなふりをしている。概念主体は、その現実の世界で *Jan* が示した興味に対して *polite* という属性を付与しているのである。

(19 e) においては、特に好意を持ってした挨拶で

はなく、無礼になるのを避けるためにした挨拶行為に *polite* を付けている。行為に *polite* を付けている点で (19b) と同じだが、(19b) は依頼をする態度や様子が礼儀正しいということである。(19e) では挨拶行為をすることがその状況において礼儀上必要と考えたから行ったということであり、行為を行った際の様子が礼儀正しかったかどうかは形式からは決定できない。

4. 結 語

本稿の目的は、形容詞と主要部名詞がどのような関係にあるのか、その依存関係について考察することであった。例えば〈色〉のような比較的安定していると感じられる属性にしても、*red* といえどどんな名詞と共起してどんな状況で使われても同じ赤色を表すということはないのであって、形容詞の意味は名詞の意味に依存し、影響を受けている。

名詞には多面的な性質があり、概念主体が形容詞の表す属性を名詞のどの側面に認めて言語化するかによって、多様な解釈の可能性が生じる。名詞の多面的性質について、*facets*、クオリア構造、*ways-of-seeing* といった概念を用いて考察した。それぞれの名詞において、その *facet* 間、クオリア間の結びつきの強さに違いがあり、結びつきが強ければそれぞれの自立度は低くなり、形容詞がどの側面に属性を付与しているのかははっきりしないことになる。

3節では、形容詞の使用や理解に、参与者や場面を含めたコンテキストについての背景知識が必要になることを見た。Fauconnier & Turner (2002: 27) は、特に *safe* が特別で例外的な形容詞というわけではなく、他の多くの形容詞の分析においても概念融合が必要であるとしている³⁾。形容詞の示す属性が主要部名詞を取り巻く状況内の参与者に付与されることは頻繁に起こることであり(例えば *intelligent question*, *healthy diet*)、コンテキストについての背景知識は不可欠なものであると言える。

参考文献

- Croft, William. (1993) "The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies," *Cognitive Linguistics* 4-4, 335-370.
- Croft, William, and D. Alan Cruse. (2004) *Cognitive Linguistics*, Cambridge University Press.
- Cruse, Alan. (2011) *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*, 3rd edition, Oxford University Press.
- Dillon, George L. (1977) *Introduction to Contemporary Linguistic Semantics*, Prentice-Hall.
- Fauconnier, Gilles, and Mark Turner. (2002) *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*, Basic Books.
- Frawley, William. (1992) *Linguistic Semantics*, Lawrence Erlbaum Associates.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Volume 1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- マクベイ・ポール・大西泰斗. (2003) 『ネイティブスピーカーの単語力 3 形容詞の感覚』研究社.
- Miller, George A. and Philip N. Johnson-Laird. (1976) *Language and Perception*, The Belknap Press of Harvard University Press.
- 小野尚之. (2005) 『生成語彙意味論』くろしお出版.
- 小野尚之. (2008) 「クオリア構造入門」影山太郎(編)『レキシコンフォーラム No.4』265-290. ひつじ書房.
- Pustejovsky, James. (1995) *The Generative Lexicon*, The MIT Press.
- Radden, Günter and René Dirven. (2007) *Cognitive English Grammar*, John Benjamins Publishing Company.
- Sweetser, Eve. (1999) "Compositionality and blending: semantic composition in a cognitively realistic framework," Janssen, Theo and Gisela Redeker (eds.), *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope, and Methodology*, 129-162.
- Taylor, John R. (1992) "Old problems: Adjectives in Cognitive Grammar," *Cognitive Linguistics* 3-1, 1-35.
- Vendler, Zeno. (1968) *Adjectives and Nominalizations*, Mouton.
- Wierzbicka, Anna. (1986) "What's in a noun? (or: How do nouns differ in meaning from adjectives?)," *Studies in Language* 10-2, 353-389.
- 安井稔・秋山怜・中村捷. (1976) 『形容詞 (現代の英文法 7)』研究社出版.

例文出典

LDOCE: *Longman Dictionary of Contemporary English*, Fifth Edition, 2009

3) Radden & Dirven (2007: 148) はこれに関して、*expensive bracelet* や *faithful husband* のような例の概念融合を示している。